

## 土浦を通った古代の駅路

「すべての道はローマに通ず」という言葉を耳にしたことがあると思います。この言葉の通り、古代ローマ帝国では、広大な領域を支配するため、中央と地方とを緊密に結び、戦争の際には軍隊を早く移動できるように直線的な道路を建設しました。こうした道路網の整備は、中央集権体制をとった古代国家では広く見られ、日本でも古代律

令国家の成立とともに、七世紀後半に各地で整備が進められました。

全国を畿内・五国と東海道や東山道など七つの行政区画に区分し、都を中心に放射状の道が作られます。当時「駅路」と呼ばれたこの道は、直線状に作られ、およそ16キロメートルごとに、馬を置く施設である駅家が設けられました。両側に側溝をもつ幅9〜12メー

国に入ります。駅路は現在の稲敷市から阿見町を抜け、土浦市域に入ったと想定されています。場所ははっきりしませんが、「曾禰駅」という駅も土浦市内にあったようです。駅路はさらに現在の石岡市にあった国府に向かいます。

古代の駅路は、直線的に作られたことに特徴があります。そのため、現在も道路として使用されていたり、道路幅がそのまま土地の区割りとして残っている場合があります。古い地図や航空写真、そして現地を歩くことで、こうした古代道の痕跡を探り、かつての東海道駅路が土浦市内のどのあたりを通っていたか推定することがある程度可能です。

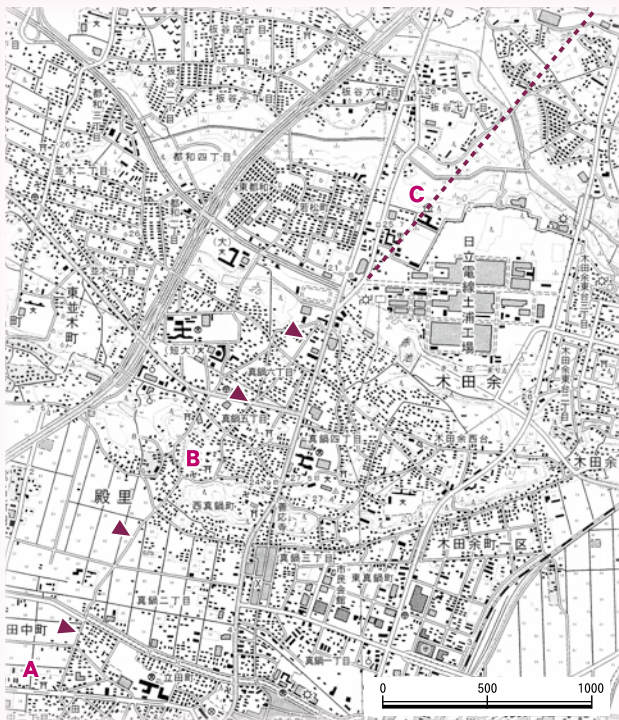
比較的明瞭なのが、桜川より北側のエリアです。田中二丁目の田中八幡神社(A)脇の道は殿里・西真鍋町方面に向かつて直線的な道路が北北東に伸びています。殿里にはこの道に沿って「長道路」という小字があります。直線道にちなんだ「長道路」、「長兎路」などの地名は、古代道推定地によくみられるものです。台地にあがる部分(B)で

道はやや東側に膨らみますが、また直線状の道路が真鍋五・六丁目と続きます。その先でいったん現在道は途切れますが、土浦厚生病院付近でまた直線道が現れます。低地に下りる斜面地(C)には古代道の特徴である切通しが残り、その先は水田のなかに堤状に小道が残されています。さらに台地上がると道はまた途切れますが、道の延長上には中貫と神立町の大字界が同じ方位で北に伸びてゆきます。工業団地を抜け、かすみがうら市、そして石岡市域まで古代道の痕跡をおよそ辿ることがができます。

私たちの足元に残る古代道の痕跡は、地域の貴重な文化遺産といえます。はるか昔の道に思いをはせると、見慣れた風景がすこし違ったものに見えるのではないのでしょうか。上高津貝塚ふるさと歴史の広場では、来年3月から古代の道に関する展覧会を開催する予定です。その際にはぜひご覧ください。

関上高津貝塚ふるさと歴史の広場

(☎826・7111)



国土地理院発行の2万5千分の1地形図(常陸藤沢)

トルもある道で、平安時代になると6メートル前後に縮小される傾向にあることがわかっています。幅の広いまっすぐな道は、国家の力を誇示する狙いもあつたようです。

常陸国は東海道に属し、下総国から続く東海道の駅路が通っていました。『常陸国風土記』などによれば、現在の利根川下流域に広がる「榎浦流海」と呼ばれた水域を渡って常陸